2025年4月6日　説教「主の兄弟たちとは」

ルカの福音書8章16〜21節

全回は8章1〜15節から学びました。そこではイエスの、四つの地に蒔かれた種のたとえ話とその解き明かしを読みました。今朝の箇所は、そこども少し関連があります。

1．光が見えるために（16〜17節）

①あかりは燭台の上に（16）**「あかりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする者はありません。燭台の上に置きます。入って来る人々に、その光が見えるためです。」**

イエスはここでもたとえで話されます。燭台には、ゼカリヤ書4章2節にあるように、「全体が金でできていて、上部には鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があり、この上部にあるともしび皿には、それぞれ七つの管がついている」といった立派な物もありました。しかし、庶民の燭台はもう少し簡素なものであるとはいえ、皿に油が注がれ、灯りがともされれば室内が明るくなりました。ところが、その灯りの上に器を置いたり、灯りを寝台の下においたりすれば光は隠されてしまいます。灯りは置かれるべき所に据えられる必要があると言われるのです。

②隠れているものはあらわに（17）**「隠れているもので、あらわにならぬものはなく、秘密にされているもので、知られず、また現れないものはありません。」**

16節のたとえに続く話しとすれば、どこかに隠されたり、寝台の下におかれていた灯りは元に戻されるのです。なぜなら、灯りの本来の目的にそぐわないからです。しかし、この節はそれだけでなく、隠されていて目に届かないもの、秘密にされている事などは、必ず露わになるという預言的な言葉となっています。

2．さらに与えられる人ととり上げられる人（18節）

①聞き方に注意（18）**「だから、聞き方に注意しなさい。」**

この言葉は4つの地に蒔かれた種のたとえ話の最後に出てくることばと関係があります。8節には、「聞く耳のある者は聞きなさい」とあります。御言葉を聞いて、それをよく咀嚼して自分のものとして適用していく時に、実は実っていくのです。聞き方に注意するかどうかは、その後に大きく関わってくるのです。

②持つ人、持たない人（18）**「というのは、持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っていると思っているものまでも取り上げられるからです。」**

聞き方によっては、百倍の実りがある一方、全く実らず悪魔に御言葉をもっていかれてしまう場合があります。ここでは別の言い方で伝えられます。つまりは、持っている人はますますもって与えられるのに対し、持たない人は持っていると思い込んでいるものまでも取り上げられてしまうというのです。試練、世の心づかい、富、快楽などで実が熟さないのと同じです。

３．イエスにとっての母と兄弟（19～21 節）

①イエスの母と兄弟達（19）**「イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のためにそばへ近寄れなかった。」**

さて、イエスの働かれているところに、その家族がやってきました。母マリヤとイエスの兄弟達です。マリヤについては受胎告知の時からイエスが十字架につけられた時に至るまで福音書には随所に出てきます。兄弟たちとは、後にエルサレム教会の牧師になるヤコブ、ユダの手紙のユダ、ヨセ、シモン（マルコ 6：3）でありましょう。ちなみにイエスには妹たちもいました。彼らは皆マリヤを通して生まれた子供たちです。彼らは、家族の絆の故に、イエスに会いに来たのですが、人々の多さのゆえに、イエスに近づくことができなかったのです。

②会おうとして外に（20）**「それでイエスに、『あなたのお母さんと兄弟たちが、あなたに会おうとして、外に立っています』という知らせがあった。」**

イエスのもとに知らせが入りました。それは、母マリヤと兄弟たちが、会おうとして外にいますよというものでした。知らせる者も、人だかりでイエスが気が付いていないと思い、そのようにしたのです。それになんと言っても、家族は誰にとっても特別の存在であり、それはイエスにとっても当然同じであると考えたからです。

③神のことばを聞いて行う人（21）**「ところが、イエスは人々にこう答えられた。『わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちです。』」**

知らせた者は、イエスがほどなく家族の方に足を向けられることと思っていたと思われます。ところが、イエスはそこにいた人々に言われたのです。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちです」と。これを聞いた者たちの反応は様々だったでしょう。「さすがイエスさま」と思う者あったでしょうし、ただ驚いた人もあったでしょう。また、怪訝そうな顔をする者もあったでしょう。家族を近くにおきながら、本当の家族は「神のことばを聞いて行う人だ」といわれたですから。

《結論》　今朝の聖書箇所から三つのことを学びます。

第一は、16 節～17 節からのメッセージです。ここにある「あかり」とは、御言葉を聞いて、内にあかりを与えられたクリスチャンのことです。ところが、あかりを与えられているのに、それを外に現わさないで、隠してしまうことがあります。しかし、それはまさに寝台の下にあかりを置くようなものでありましょう。自分が意識するかどうかは別にして、キリストをうちに宿すことは光を与えられることなのです。であれば、それを内にしまってしまうのではなく堂々と外に現わすことは自然なのです。光は燭台の上に置いてこそ意味があるのです。私はクリスチャンになったのは、まだ高校生でしたが、「梶川ってクリスチャン？」と聞かれてことがあります。その時に、まずいことを聞かれてしまったような気がして「え、まあね」と答えて終わりしてしまったことがありました。そのことがいつも心の中にひっかかっていました。それが後に、きちっと学ばなければらないと思うことにもなったのも事実です。今回、「ぶどうの樹」が発行されますが、ある面は外の人の目に兄姉の証しがなされるわけです。灯りともされたことになります。用いられるように祈ります。

第二に、17 節を別の面から考えます。「隠れているもので、あらわにならぬものはなく、秘密にされているもので、知られず、また現れないものはありません。」という御言葉は、私たちの隠されている罪の問題についても語られているのではないでしょうか。自分では気が付かないでいる罪がまずはあります。それらは必ず、自分のうちに明らかにされていくのです。もし、罪の自覚を与えられたのなら、主の前に罪の告白をしましょう。また、もう一つは、自分もそれが罪であることを知っていて、隠していることがありましょう。それらはやがて外に出されることになります。しかし、もし今それを意識したのなら、早速に神の前に悔い改めの祈りをささげましょう。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（第一ヨハネ 1 章 9 節）。このお言葉は真実です。

第三に、イエスが「私の母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちです」（21 節）と言われた点についてです。ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスと弟子達はそこに招かれた時、母マリヤもいて、「ぶどう酒がありません」とイエスに言いました。するとイエスは「あなたとわたしと何の関係があるのでしょう。女の方」（ヨハネ2:2，3）と言われました。また、イエスが12歳の時、教師達と宮で議論をしていた時に母がとがめると、「わたしが自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか」と言われました（ルカ2:41以下）。こうした出来事を見る時に、ここでもイエスは母や兄弟達を疎んじていたのではなく、ご自分が誰であるかを明かにしておられるのだとわかります。イエスのまことの父は父なる神であり、母や兄弟達は地上における関係でした。そのことを、目の前の人々にも知ってもらわなければならなかったのです。イエスは言われました。「神のことばを聞いて行う人たちが、母であり兄弟なのです」と。それはどういう意味でしょうか。キリストはあのぶどうの木の話をされた時にこんなことを言われています。「わたしがあなたがたに命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です」（ヨハネ15:14）。主の御言葉やご命令を自分へのものと信じ、真摯にこれを守り行おうとする人こそが、主にある家族であることを言われているのです。もちろん、人は自力で御言葉を実行することはできません。しかし、御霊の力をいただきながら、それを行うおうとする時に、主はまるで兄弟であるかのように接してくださるのです。罪や咎を赦し、悩みや悲しみを理解し、世の人々が捨てる時にも友となってくださるのです（讃美歌312「慈しみ深き」参照）。

私たちにも主は「御言葉に立ちなさい」「そこに生きなさい」「みことばを行いなさい」と呼びかけてくださっています。そして、そのときに私たちにとってもイエスは兄弟のように親しい主となって導いてくださるのです。